



アジア地域共同出版計画会議 企画
ユネスコ・アジア文化センター 編

サンゴ礁軍団

松岡享子 監訳





サンゴ礁軍団

松岡享子 監訳

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

東京書籍

現代アジア児童文学選 3

サンゴ礁軍団

昭和58年10月1日 第1版第1刷発行

訳 者 原みち子・張替恵子
間崎ルリ子・松井由紀子
三神弘子

発 行 者 小高民雄

発 行 所 東京書籍株式会社
東京都台東区台東1-5-18 〒110

印刷・製本 図書印刷株式会社

定価1000円

©1983, Printed in Japan

乱丁・落丁の場合はお取替いたします

8397-518048-5313

現代アジア児童文学選 — 3

サンゴ礁軍団

も

く

じ

ビルマ

おばけやしき

5

ペトナム

サンゴ礁^{しょう}軍団

15

パキスタン

バハードウル少年の旅^{たび}路^じ

33

タイ

ねこを捨てれば

57

イラン

第一の掟^{おきて}

73

スリ・ランカ

新しいズボン

87

中

国

映画の切符^{きつぷ}

107

フィリピン

星への旅

123

パプア・ニューギニア

ぼくたちの村の思い出

137

● 翻訳者一覧

おばけやしき

三神弘子

サンゴ礁軍団

三神弘子

バハードウル少年の旅路

原 みち子

ねこを捨てれば

間崎ルリ子

第一の掟

原 みち子

新しいズボン

松井由紀子

映画の切符

間崎ルリ子

星への旅

張替恵子

ぼくたちの村の思い出

張替恵子

ビルマ

おばけやしき

サヤウン・ティン・シユエ 作

ティン・シオン 画

三神弘子 訳

マンダレー・メイミヨ通りに、一軒の大きなやしきがたつていました。そのやしきには、おばけが出るといいうわさがありました。やしきは、病院のしき地の中にあり、そこだけ別に、さくで囲われていました。建物は二階建てのりっぱなものでしたが、ここでひと晩すごそうなどという者は、ひとりもいませんでした。

いつだったか、病院の夜警が二人、そこでひと夜をあかそうとしたことがありました。



すると真夜中に、だれか——
いや人間ではなかったかもし
れません——がやってきて、
キュツキュツと蚊帳^{かや}をひっぱ
りました。目をさました二人
の耳に、こんどは今にも死に
そうな人間のうめき声がきこ
えてきました。続いて、だれ
かがあらい息をしているのが
きこえました。奇妙な音ばかり
するので、二人はすっかり
こわくなり、もう、ねむるこ
とができませんでした。

そのあと、二人は、部屋の
すみから自分たちをじっと見





ている赤い二つの目に気がつきました。その目が消えたと思うと、こんどは階段を登ってくる足音がはっきりときこえました。「だれだ？」と、二人はさけびました。音はぴたとやみました。すると、こんどは屋根の上で別の足音がきこえました。それから、だれかが屋根から落ちたようなドサツという大きな音がしました。二人は階段をかけおりて、懐^{かい}中^{ちゅう}電灯^{でんとう}で屋根を照らしました。なにもいません。でも、二人は、もう二階にもどる勇氣がありませんでした。

この話がうわさとなって、どんどん広まりました。人々は、ここでねむることはおろか、近づくことさえしなくなりました。

ところで、この病院にティン・シュエ博士



という若いお医者さんがいました。この人は、おばけの存在を信じていない人で、じっさい、おばけが出るといううわさを一つずつたしかめていました。

ある晩、ティン・シュエ博士は、同じようなことに興味をもっているもうひとりのお医者さんといっしょに、九時ごろやしきにやってきました。二人は、それぞれ寝ぶくろを用意していました。やしきには電気がきていなかったのです。博士と友人は、ろうそくのあかりで大きなやしきを見てまわりました。いくつもある大きな部屋の天井が亜鉛の彫刻でかざられているのは、ぶきみな光景でした。

ひとわたり家の中を見てまわってから、二人はろうそくを消してねむることにしました。真





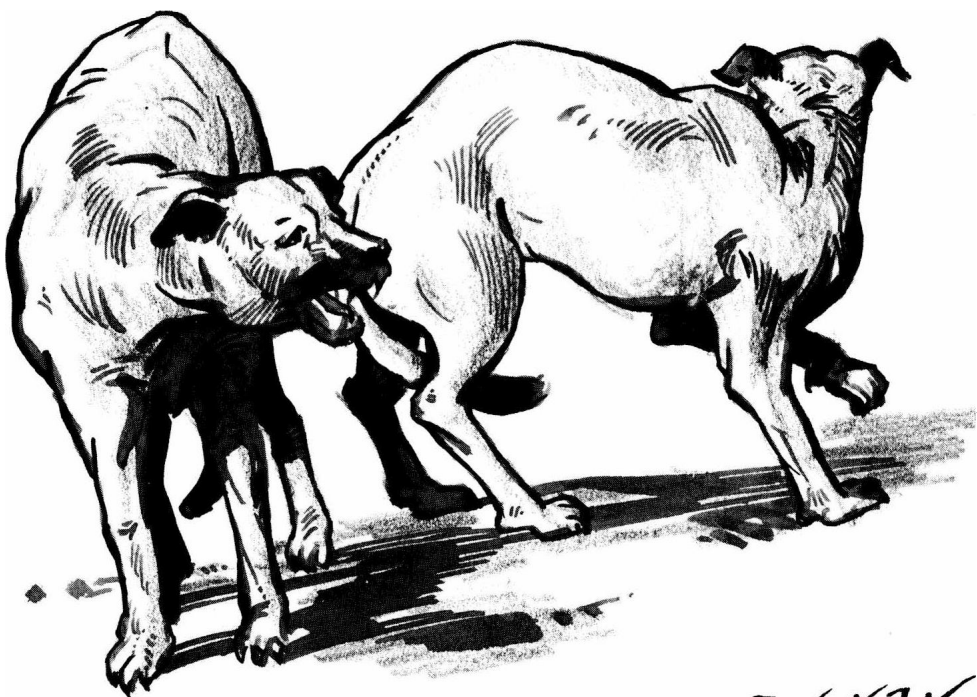
夜中にはまだまがありました。なにごともおこらないので、二人は、いつのまにかうとうとし始めました。が、とつぜん、なにかが蚊帳をひっぱるのに気がついて、目をさしました。二人はとびおきて、懐中電灯をつけました。

そこにいたのは、二、三匹のコウモリでした。二人の博士は、ろうそくに火をつけて、部屋じゅうを注意ぶかく調べました。部屋のかたすみから、二つの赤い目が二人をじっと見つめていました。二人は、真正面から懐中電灯でその目を照らし、目のほうへ走ってい



きました。そばまでいった
とたん、目の前に一匹のジ
ヤコウネコがとび出し、そ
のまま逃げていきました。
二人は、大きく息をつきま
した。ジャコウネコはくら
やみにひそんで、小さな動
物にとびかかる機会をねら
っていたのにちがいありま
せん。

さんざんうわさされたあ
の赤い目のなぞがとけて、
二人の友人は、これがそう
だったというように、につ
こりわらってうなずきあい



テンツン

ました。

ちようどそのとき、まぎれもなく病人のうめき声と思われる音がきこえ、深いため息があとに続きました。二人の博士は、懷中電灯をつけて、音のする部屋のすみへとんでいきました。

そこで二人が見つけたのは、病人でもゆうれいでもなく、クークー鳴いている母バトと子バトでした。おとなしい親子のハトは、おどろいてつばさをばたばたさせながら逃げていきました。二人の博士は、またおかしそうに、にっこりしました。

そのままそこに立っていると、今度は、階段を登ってくる足音がきこえま

した。二人は、いそいで懐中電灯を消し、ろうそくをともし、ぬき足さし足とびらのほうに進みました。それから耳をとびらにしっかりとつけて、耳をすませました。ちょうど足音がとびらの前にくるときをみはからって、二人の博士は、懐中電灯をにぎりしめて、ぱつととびらをあげました。

懐中電灯が照らし出したのは、うれしいではなく、二匹ののら犬でした。二人の博士は、心の底からゆかいになってわらいました。

そのあと、だれかが屋根の上を歩く音がしました。バンバンという大きな音もしました。二人は、壁にはしがたでたてかけてあるのを見つけて、それを登って天井を調べてみました。すると、屋根の上のうれしいのなぞがとけました。

屋根をふいてある波型の鉄板は、昼間、太陽の熱をうけて、少しずつぼうちょうします。それが夜になって、屋根の木の部分との間にすきができ、がたがたと、へんな音をたてていたのです。

二人の博士が、こういうことをじっさいに見てきたあとでは、人々はだれも、このやしきにおぼけが出るとはいわなくなりました。